

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

# 「伊豆伊東迎歳記および群馬県一郡巡講日誌」「下総銚子紀行 付還暦記事」註解

著者	出野 尚紀
雑誌名	井上円了センター年報
巻	27
ページ	195-207
発行年	2019-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00010667/">http://id.nii.ac.jp/1060/00010667/</a>

# 「伊豆伊東迎歳記および群馬県一郡巡講日誌」「下総銚子紀行 付還暦記事」註解

出野尚紀

*ideno naoki*

一、はじめに

筆者は、『井上円了センター年報』第二十五号で井上圓了（以下円了）が大正六年（一九一七）に群馬県で巡講をしたさいの記録である「群馬県第一回巡講日誌」の註解を試み、同第二十六号で「群馬県第二回巡講日誌」の註解を試みた。本稿はそれらに続く「伊豆伊東迎歳記および群馬県一郡巡講日誌」と「下総銚子紀行 付還暦記事」の註解である。

円了は六年に九月二十六日から十月三十一日までと十一月十六日のから十二月十二日までの二度群馬県巡講を行ったが、さらに今回註解を施した七年一月にも群馬県巡講を行っている。この三回で館林を中心とした邑楽郡以外を巡講したことになる。短期間に県内のほとんどもを回るのは他に見られない事例である。また、円了は毎年のように新春を温暖な温泉に保養に赴いて英気を養いながら迎えているが、七年は伊東で迎えている。この湯治に出発する前に巡講から帰宅したのは、十二月十四日であり、翌日の内田周平還暦祝宴に参加してから一週間で旅に出たことになる。なお、六年に結婚した息子の妻の実父と迎えている。三回目の世界周遊旅行の途中に娘

婿の金子恭輔とスイスを旅行している。巡講には随行者がいるが、このように姻族と旅先で同行していることは、これまで指摘がされていないことである。「下総銚子紀行 付還曆記事」は、巡講の記録ではなく、個人的な小旅行の記録である。一月二十八日に出発し、二月五日に帰宅している。その間醬油醸造所や犬吠埼、犬若が記されているが、これらの場所を訪れたのだろう。そして、二月四日と戸籍に記されている天保暦の誕生日をそのままグレゴリオ暦に当てはめて満六十歳を還暦として、謝恩の寄付と今後の意気込みを記している。これは、円了の行動原理が表されている部分の一つである。謝恩を示す先が、自分が創ったところ、自分が世話になったところ、それも特に自宗派の真宗大谷派と出身地、そして、今後世話になりそうところとなっている。この寄付先の選び方と金額に円了の考え方が分かる。

付け加えておくと、次の巡講は二月十五日夜に出発した愛知県巡講であり、これは稿を改めたい。

訪問地は当時の地名で表し、現在の地名を括弧内に付した。逆に講演場所は、原文では「小学校」との表記で学校名まで記されていないので、当時の学校名を調べて記し、現在の名称や変更は註とした。また、小学校に高等小学校が併設されていた場合は「尋常高等小学校」、そうでない場合は「尋常小学校」としている。人名の敬称は原文のままとした。原文の誤記は判明した範囲で修正し、原文の表記を註に記している。漢詩や和歌などがちりばめられ、円了の感興が分かるけれども削除し、制作したことのみを記した。しかし、銚子の俗謡を書物から引用したものについては、出典の書物の所在が不明のため現代仮名遣いに変えて入れている。一続きの「伊豆伊東迎歳記および群馬県一郡巡講日誌」は伊東の部分と群馬の部分に区切った。

以下に示したのは、『井上円了選集』第一五卷二六四頁から二六八頁の「伊豆伊東迎歳記および群馬県一郡巡講日誌」と同巻二六九頁から二七二頁の「下総銚子紀行 付還曆記事」を参考に、『南船北馬集』第十五編の三五

頁から四〇頁の「伊豆伊東迎歳記および群馬県一郡巡講日誌」と四〇頁から四三頁の「下総銚子紀行 付還暦記事」の記述を現代語に解釈し、註釈を施したものである。

原文では、詩文や漢文・仏典からの語句引用、漢文に基づく表現技巧など円了の知的レベルの高さを示す語が多く味わいがあるが、それらを平易な語に変えたため、巡講日誌が本来持っていたリズムが失わせてしまっていることをご了承ください。

## 二、伊豆伊東迎歳記

大正六年（一九一七）十二月二十二日 晴れ。朝八時半に東京駅を出発して、伊豆の伊東温泉に向かった。これは今年一年間の地方巡講の疲労をいやそうとするためである。午前十一時に国府津駅に着いたけれども、「伊豆に向かう」汽船①はまだ到着していなかった。正午に出帆の決まりであるが、午後三時半にようやく国府津〔の港〕を出発し、熱海、網代を経て夜の七時半に、伊東町の旧松原村域に到着し②、猪戸の榎屋③に宿泊した。七、八年ぶりにてここにやって来た。市街の見た目が多く新しくなっている感じがした。その翌日から毎日、西風が吹いて寒気が強かった。滞在中は、漢詩を吟じた。また、伊東につきて俗謡を詠んだ。

十二月三十一日日曜日 穏やかな晴れ。暖香園④に行つて古谷忠造氏⑤を訪ねて、一緒にして葛見神社のクス⑥を見る。幹の周囲は十六メートルあまり⑦で、熱海来宮神社のクスノキ⑧に匹敵する大樹である。音無神社⑨、東林寺⑩、伊東祐親墓⑪、物見松⑫などを巡つて帰った。

大正七年戊午元旦 伊東で新年を迎えたので漢詩を一つ作った。

伊東の旅館は、猪戸では榎屋を一番とし、そのつぎに湯本館、東京館、山田屋⑬などがある。玖須美には暖香

園、伊東館などがある(14)。

一月三日、東洋大学へ向けて、新年会欠席の断りを左のような文面の電報で送った。

「電信に代理たのみて伊東より、年賀を述ぶる我は井上。」(15)

また、新年勅題(16)にしたがって漢詩を二首作った。

四日 晴れ。急に帰京を思い立ち、路線バス(17)に乗って伊東を去り、冷川(18)を経て大仁駅に行った。道程約二十キロメートル(19)を一時間半で走った。大仁駅から汽車にのり「三島駅(20)で乗りかえて」帰京した。

### 三、群馬県一郡巡講日誌

大正七年(一九一八)一月十一日。朝八時半に上野出発し、午前十一時に群馬県多野郡新町(現群馬県高崎市)の新町駅に着いた。駅前の丸竹旅館に入って休憩し、午後、公会堂共楽館で講演会を開演した。主催は青年会で、発起人は町長の高橋房吉氏(21)、助役の椎名保三郎氏、新町尋常高等小学校校長の浜野熊吉(22)氏、軍人会副会長の安野豊作氏であった。この日、郡長の堀太郎作氏、郡視学の伊藤新作氏が出席された。この町には製糸場と紡績場あって大いにぎわっている。多野郡は県下の各郡のなかで、新暦採用の先鞭をつけた土地であるそうである。一般に新正月を用いる。今日は十一日正月である。

十二日 晴れ。人力車で行くこと約八キロメートル(23)で、多野郡美九里村(現群馬県藤岡市)に至り、午後、美九里尋常高等小学校で講演した。発起人は村長の斎藤幸市氏(24)、美九里小学校校長(25)の針谷台作氏(26)である。この村は養蚕が主体なだけあって、四面みな桑園のみであった。この夜は造酒家かつ旧家である田島文太郎氏の宅(27)に宿泊した。

一月十三日（日曜） 晴れ。朝、田島氏の名酒「竹に雀」を傾けつつ、「田島なる竹に雀に誘はれ、我も朝から千代千代と呼ぶ」<sup>(28)</sup>と駄洒落を作った。人力車で行くこと約十二キロメートル<sup>(29)</sup>、吉井町（現在群馬県高崎市）に移動した。かつて藩の陣屋があったところである。午後に、吉井尋常高等小学校で講演した。吉井小学校長・学事会長の新井巴氏<sup>(30)</sup>、吉井町長・教育会長の棚島福七郎氏<sup>(31)</sup>、青年会長の江原定七氏が発起人である。宿所は金子旅館である。当地には篤志家堀越文右衛門氏<sup>(32)</sup>がいて、古稀と金婚の記念のため、小学校に講堂一棟を丸ごと寄贈されたと聞いた。この地方にはタバコを生産しているそうである。先年兵庫県で知己を得た小林正義氏に再会することができた。町内より二キロメートル弱<sup>(33)</sup>離れたる所に、日本三碑の一つである多胡碑がある。

十四日 晴れかつ風が強い。昨夜来、正月の松飾りの松を集めて未明に焼いている。これを「道祖祭」または「ドンドンヤキ」というそうだ。その松飾りの跡にニワトコの木を削って作る木花と称するものを立てるそうである。午前は、人力車で行くこと約十六キロメートル<sup>(34)</sup>の、多野郡鬼石町（現群馬県藤岡市）に移動し、午後は、鬼石尋常高等小学校で講演した。この町は神流川の咽喉<sup>(35)</sup>を占め、その地勢は下仁田に似ている。そして町名の起源は、鬼石神社の奥院の縁の下に鬼石があることによる。その直径は百二十センチメートル、地面から出ている高さが九十センチメートル、磐座<sup>(36)</sup>とであるそうだ。この地域から狹隘なる峠道をさかのぼり、上信国境の十石峠まで約五十五キロメートル<sup>(37)</sup>ある。この間には茶盆石、雲石、姥石など、奇石の数が四十八個あると聞いたので、これを入れた漢詩を作った。

この川の源に高天ヶ原および神ヶ原と名付けた地名がある。乙父、乙母と名付けた集落がある。また、その下流には木ノ宮、土ノ宮、金ノ宮など、木、火、土、金、水の地名があるそうだ。開会発起人は町長の岩城善郎氏<sup>(38)</sup>、鬼石小学校長の川端安蔵氏<sup>(39)</sup>である。当夕は、三島屋旅館に宿泊し、この町の名酒「鬼面山」<sup>(40)</sup>を傾けた。

十五日 穏やかな晴れ。神流川に沿って下ること約十一キロメートル、郡役所在地である藤岡町（現在群馬県藤岡市）に着いた。途中に、八塩鉱泉があり、塩泉であるようだ。藤岡から約八キロメートルの距離で、旅館には桜雲閣、通称浦部がある。藤岡の会場は藤岡中学校、主催は青年会、発起人および尽力者は町長の作宮久太郎氏<sup>(41)</sup>、町会議員の島崎芳太郎氏、宮司の須川虎之助氏である。それから藤岡中学校長は長沢開右衛門氏<sup>(42)</sup>、教育副会長は星野兵四郎氏<sup>(43)</sup>である。この町には造酒家が多いと聞いた。当夕は、柏屋旅館<sup>(44)</sup>に宿泊した。

十六日 朝は雪が降った。人力車で行くこと約四・三キロメートル<sup>(45)</sup>の新町駅から汽車に乗り、午前十一時に上野駅に着いた。今回の随行は角田松寿氏であった。

一月二十日（日曜） 温かく晴れ。東洋大学すなわち哲学館創立の際に、特に尽力を傾けていただいた故伯爵勝海舟先生、故男爵加藤弘之博士、故真浄寺住職寺田福寿師<sup>(46)</sup>に対して、先頃行った「三十年記念会」の報告をしようと考え、境野哲氏、郷白巖氏など総員七名で、墓前に拝跪し、報告文を読み、かつ在世中の恩義を感謝した。

#### 四、下総銚子紀行 付還暦記事

大正七年一月二十八日 晴れ。野外散策を思い立ち、両国駅午前十時四十分発の汽車に乗り込み、午後二時十分の下総国海上郡銚子町（現在千葉県銚子市）に到着し、駅から約九百メートル<sup>(47)</sup>離れた一等旅館である大新旅館<sup>(48)</sup>に着いた。楼閣名を江月楼という。利根川の河口に面していて、太平洋もあわせ望むことができて、楼上の眺望は絶佳である。ただ、ときどき管弦の音色がうるさくなることを欠点としなければならぬ。その他、旅館としては観音前に吉野屋があり、駅前通りに川安館と銚子館<sup>(49)</sup>があるけれども、江月楼に比肩することはできない。

この町は千葉県下の大市街であるが、半分は漁業で生計を立てていて海産を主な産物としている。これに次ぐ産物は醤油である。ヤマサ醤油(50)の醸造所はとても大規模で、その一年の醸造高は九千キロリットル(51)と聞いた。町内の名所の第一は観音堂である。飯沼山円福寺といって、真言宗に属す。市街の中央に位置を占める。気候は東京よりもいくぶん温暖で、一年を通して雨に降られることは少ないという。しかし、風のある日は東京以上の寒さを感じる。滞在中に漢詩を二首作った。

この町は各戸屋上に貝殻を載せているので海螺城(52)と言われていたけれども、今その多くは瓦葺きに変わった。よってこのことを詩のなかに入れた。ついでに『銚子案内記』(53)のなかから俗謡を選んで載せておく。

泣いてくれるな出船のさきで、さをも櫓櫓も手にかぬ(船唄)。

お前ゆくならワシをも連れて、下は奥州のはてまでも(同上)。

わしは磯辺の船頭の娘、舟ぢや櫓も漕ぐ櫓も引く(同上)。

水の流れは土俵でとめる、船の流れは碇でとめる。主の浮気は誰がとめる(盆唄)。

盆の踊に踊らぬ奴は、木仏金仏石ほとけ(同上)。

おらが隣りの千松は、近江の軍に頼れて、一年たつてもまだ来ない、二年たつてもまだ来ない、三年たつて首が来た(童謡)。(54)

銚子駅から直線距離で四・五キロメートルほど(55)隔てて犬吠崎灯台がある。その高さが三十一・三メートル、海面からの灯火までの高さが五十一・八メートル、その光が達する距離を十九・五海里(56)と記されている。こ



の灯台は明治五年の起工、七年の点火であり、明治文明史に記録すべき灯台である。ここで漢詩を一首作った。

同所には海水浴旅館曉鷄館<sup>57</sup>、御風館、そして快哉楼などがある。これより直線距離で一・五キロメートルほど<sup>58</sup>離れた犬若浦には犬若館がある。この海岸一帯は危ない岩礁、奇怪な岩が多いことで名が世間に伝わっている。二月五日、帰京した。

次に還暦の記事を掲げよう。私は戸籍に記されているところでは安政五年二月四日<sup>59</sup>に出生となっている。（実際より一年多いが）そうであれば本年は還暦に当たることになる。およそ世間の慣例として祝宴を開き、祝品を贈ることを常にするけれども、私は一切これを廃し、人からの祝賀を受けず、自らも祝意を表さず、その代わりに貧囊を傾けて公共事業の方へ、以下のように寄付することに決めた。

一金五百円を東洋大学へ

一金三百円を哲学会へ

一金一百円を真宗大学<sup>60</sup>へ

一金一百円を郷里中学校（長岡中学和同会）<sup>61</sup>へ

一金一百円を郷里小学校（来迎寺村来迎寺尋常小学校）<sup>62</sup>へ

一金二十円を江古田小学校へ

合計 金一千百二十円也

右のほか、家族および親類などに金三百八十円を分配し、総計金一千五百円となる。

還暦の漢詩を二首作った。そして、私が思うところは以下の通りである。

人は不満々で欲望に涯がなく、あくまで功名を得られる場所に逐いかけてその欲をみたそうとするけれども、私は明治大正の栄えている時代にたまたま出会えたことをもって無上の光栄、至極の幸福とし、朝夕ただどうにかしてこの恩に報い答えるべきかを思っているほかは、なんの欲望もなければ、名誉心もないのである。今や幸いに還暦を迎えることを得たならば、余命のある限り、国家のためにますます奮励努力するだけである。

## 参考文献

- 伊東市史編さん委員会編『図説伊東の歴史』伊東市教育委員会、二〇〇九年  
伊東市史編集委員会、伊東市教育委員会編『伊東市史…史料編近現代Ⅰ』伊東市、二〇一四年  
井上円了『南船北馬集』第十五編、国民道德普及会、一九一八年  
井上円了、東洋大学創立一〇〇周年記念論文編集委員会編『井上円了選集』第一五巻、東洋大学、一九九八年  
多野藤岡地方誌編集委員会編『多野藤岡地方誌…各説編』多野藤岡地方誌編集委員会、一九七六年  
多野藤岡地方誌編集委員会編『多野藤岡地方誌…総説編』多野藤岡地方誌編集委員会、一九七六年  
三浦節夫、出野尚紀編『東洋大学創立寄附者名簿』東洋大学井上円了研究センター、二〇一七年

## 【註】

- (1) 『図説伊東の歴史』一七二―一七三頁所収の鳥瞰図に、東京の靈岸島と伊東、国府津と伊東という二つの航路が東海汽船によって毎日運航されていたことが記されている。
- (2) 円了は明治二十二年の町村制実施にともなう合併で伊東村になったことを念頭に、町村制以前の旧名である「松原」

を添えたと考える。

(3) 近年まで、かつて猪戸であった現在の伊東市中央町に、「ニューますや」というホテルがあった。

(4) 現在も伊東市竹の内一丁目で営業している。

(5) 円了の長男・玄一の妻・信の父。当時は、海軍を退役し、東京商船学校長を務めていた。東洋大学井上円了研究センターが所蔵している井上家のアルバムによる。

(6) 伊東市馬場町一丁目にある神社。このクスは「葛見神社の大クス」の名称で一九三三年二月二十八日に国の天然記念物に指定されている。

(7) 原文は「五丈三尺」としている。伊東市のホームページ (<http://www.city.ito.shizuoka.jp/shougai-gakushu/html/shiteibunkazai/20140327132944.html>) では目通り十六メートル、文化庁の国指定文化財等データベース (<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp>) では十五メートルとなっている。(いずれも二〇一八年十一月二十九日最終閲覧)

(8) 文化庁の国指定文化財等データベース (<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp>) によれば、来宮神社の境内にあり、「阿豆佐和気神社の大クス」の名称で一九三三年二月二十八日に国の天然記念物に指定されている(二〇一八年十一月二十九日最終閲覧)。

(9) 伊東市音無町にある。

(10) 伊東市馬場町二丁目にある。

(11) 伊東市大原一丁目。伊東祐親は平家方の武士で、源頼朝の最初の妻の父、曽我兄弟の仇討ちにも関連する。

(12) 伊東市ホームページ (<http://www.city.ito.shizuoka.jp/shichou/koushitsu/html/sininitoshikouen/toshikouen/20170213181807.html>) によれば、現在、周囲は物見塚公園となっており、尾上紫舟詩碑、伊東祐親像などがある。(二〇一八年十一月二十九日最終閲覧)

(13) 現在も伊東市猪戸一丁目に「やまだ屋」という旅館がある。

(14) 註一の鳥瞰図において「山田屋」は「山田館」に、「伊東館」は「伊藤館」になっている。また、前出『図説伊東の歴史』一七〇頁には「当時の一流旅館『柵屋』に」と記されている。

(15) 『南船北馬集』第十五編、三六頁より手を入れずそのまま引用した。

(16) 大正七年の勅題は「海辺松」。

- (17) 原文は「定期の自動車」としている。この路線は宇佐美から伊東を経て大仁駅に至るものであるが、大正五年十二月六日付で静岡県知事の営業許可が下りたばかりである。『伊東市史…史料編近現代Ⅰ』三九八頁「三五五 伊東自動車に対する営業許可」を参照した。
- (18) 現在の伊豆市冷川。
- (19) 原文は「五里」としているが、冷川経由の経路だと、伊東駅から大仁駅まで最短でも二十五キロメートルほどである。ここでは、原文の値をメートル法に換算した値とした。
- (20) 現在のJR東海御殿場線下土狩駅。
- (21) 第十二代町長。『多野藤岡地方誌…各説編』二九〇頁を参照した。
- (22) 第四代校長。『多野藤岡地方誌…各説編』二九二頁を参照した。
- (23) 原文は「二里」、新町小学校から美九里小学校間の道のりを計測した。
- (24) 第四代村長。『多野藤岡地方誌…各説編』二〇三頁を参照した。
- (25) 後の美九里東小学校、円了巡講当時美九里村には美九里尋常小学校と美九里尋常高等小学校の二校があった。『多野藤岡地方誌…各説編』二〇四—二〇六頁を参照した。
- (26) 明治十二年—昭和十三年、『多野藤岡地方誌…各説編』一二八頁を参照した。八代校長、『多野藤岡地方誌…各説編』二〇六頁を参照した。
- (27) 天保六年六代重興が造酒業を始めた名主であった群馬県藤岡市神田の田島酒造であるが、近年廃業した。昭和十三年に「竹に雀」の銘柄を「三波石」改めた。銘柄は『多野藤岡地方誌…各説編』三八七頁にもでている。(二〇一八年十一月二十九日にグーグルマップで確認したところ「閉鎖」と表示された)
- (28) 『南船北馬集』第十五編、三七頁より手を入れずそのまま引用した。
- (29) 原文は「約三里」としているが、現在の県道四十一号線経由では、田島酒造があったところと高崎市立吉井小学校の間は十一キロメートルほどである。他の経路を通ったと思われるが、実際の経路が不明なため、ここは、原文の値をメートル法に換算した値とした。
- (30) 小学校長であったことは、『多野藤岡地方誌…各説編』四三四頁を参照し補った。
- (31) 嘉永五年—昭和十二年、初代藤岡小学校長、吉井町長、県会議員などを務めた。『多野藤岡地方誌…総説編』八六四頁を参照した。吉井町長であったことは、『多野藤岡地方誌…各説編』四二八頁を参照し補った。

- (32) 原文は「堀越文左衛門」としている。安政四年―大正十三年、名は富美。吉井町長、県会議員を務めた。『多野藤岡地方誌…各説編』四六四―四六五頁を参照し、変更した。
- (33) 原文は「二十丁」、吉井小学校から多胡碑間の道のりを計測した。
- (34) 原文は「約五里」、吉井小学校から鬼石小学校間の道のりを計測した。
- (35) 「山あいから開けた場所に出るところ」の意。
- (36) 円了が「直径四尺、高さ三尺」しているものを、そのまま換算した。この値は『多野藤岡地方誌…各説編』三三八頁でも同じ長さである。
- (37) 原文は「十三里」、鬼石小学校から十石峠間の道のりを計測した。
- (38) 第六代町長。『多野藤岡地方誌…各説編』、三二八頁を参照した。
- (39) 第十三代校長。『多野藤岡地方誌…各説編』、三三〇頁を参照した。
- (40) 現在も鬼石にある蔵元の藤崎惣兵衛商店群馬支店で作られている。
- (41) 第七代町長（大正二年三月―六年四月在職）。『多野藤岡地方誌…各説編』四頁を参照した。
- (42) 第三代校長。『多野藤岡地方誌…各説編』五一九頁を参照した。
- (43) 慶応三年―昭和七年、諱は久次、兵四郎は襲名。明治四十一年より多野郡教育会副会長を務めていた。『多野藤岡地方誌…各説編』四頁を参照した。
- (44) 同名の旅館が藤岡市藤岡に存在するが、円了宿泊当時から営業を継続しているものなのかの確認はできなかった。同旅館ホームページ (<http://www.wind.ne.jp/kashwaya>) を参照した。（二〇一八年十一月二十九日最終閲覧）
- (45) 原文は「一里」、柏屋旅館から新町駅間の道のりを計測した。
- (46) 彼らが「東洋大学の三恩人」であるが、加藤が亡くなってから最初の周年行事であり、三人の墓に参った最初の機会でもある。
- (47) 原文は「四、五丁、銚子駅から大新旅館間の道のりを計測した。
- (48) 銚子市中央町に存在する。同旅館ホームページ (<http://www.newdaishin.com/daishin>) を参照した。（二〇一八年十一月二十九日最終閲覧）
- (49) 銚子市西芝町に存在する。銚子市旅館ホテル組合ホームページ (<http://www.choshi-ryokan.jp/hotel/005/index.html>) を参照した。（二〇一八年十一月二十九日最終閲覧）

(50)

原文は「山サ」と商号で記している。当時の会社名は「浜口儀兵衛商店」であり、昭和三年十一月に現会社名に変更した。ヤマサ醤油株式会社ホームページ (<https://www.yamasa.com/enjoy/history/science>) を参照した。なお、『東洋大学創立寄付者名簿』によれば、浜口儀兵衛の名は哲学館寄付者のなかに見え、館賓となっている。

(51)

原文は「五万石」と記している。前記ヤマサ醤油ホームページによれば、明治二十六年の生産高は四千石（七百二十キロリットル）だったという。

(52)

「海螺」は海生の巻き貝のこと。

(53)

国立国会図書館やNII学術情報ナビゲータのデータベースに一致するものはなかった。

(54)

これらの舟唄、盆唄、童謡は、『南船北馬集』第十五編、四一頁より手を入れずそのまま引用した。

(55)

原文は「一里余」としている。

(56)

円了は高さを「九丈、海抜高を「十六丈八尺」、光達距離を「十九湊余」としている。

(57)

銚子市犬吠埼。現在は「ぎょうけい館」という。同旅館ホームページ (<https://www.gyokukan.com>) を参照した。  
(二〇一八年十一月二十九日最終閲覧) その他の「御風館」「快哉楼」「犬若館」は現在宿泊施設としては営業していない。円了が訪れた当時における犬吠埼の観光と宿泊施設については本多弘樹、二井昭佳「犬吠埼周辺の観光の変化に関する研究」『第三六回土木学会関東支部技術研究発表会発表要旨』土木学会関東支部技術研究発表会、二〇〇九年、IV—六四 (<http://library.jisce.or.jp/jisce/open/00061/2009/36-04-0064.pdf>) にも記されている。

(58)

原文は「十余丁」、ぎょうけい館から犬若漁港までの距離を計測した。

(59)

グレゴリオ暦では、一八五八年三月一九日に当たる。

(60)

現在の大谷大学。

(61)

現在の新潟県立長岡高等学校。

(62)

昭和四十四年四月に町内の他の小学校とともに越路町立越路小学校（現長岡市立越路小学校）に統合された。